

## 幼小接続期の実践と課題

### —お茶の水女子大学附属幼稚園・附属小学校の試み—

企画・司会	小玉亮子	(お茶の水女子大学大学院)
話題提供	伊集院理子	(お茶の水女子大学附属幼稚園)
	上坂元絵里	(お茶の水女子大学附属幼稚園)
	岡田博元	(お茶の水女子大学附属小学校)
指定討論	酒井 朗	(大妻女子大学大学院)

#### 1、企画主旨

平成22年度より、お茶の水女子大学の幼小接続期研究は、第三ステージとして附属幼稚園と附属小学校による共同研究を開始した。本報告では、お茶大接続期教育の考え方を提示したうえで、平成24年度の附属小学校一年生と附属幼稚園の年長でおこなった接続期教育の試みを中心に報告する。幼小接続期教育の実践を支える考え方、実践によって生み出された知見、実践から見えてきた課題を整理し、接続期教育の在り方について検討することを目的としている。

加えて、幼小接続期の園/学校における子どもたちにとっての課題のみならず、子ども・教師・保護者という三者関係における課題をとらえる視点を検討したいと考えている。

#### 2、お茶大接続期教育の考え方

本学附属では、「なめらかな接続」と「適度な段差」をキーワードにして、幼稚園の年長後期から小学校1年1学期を、特別な配慮を要するひとまとまりの時期「接続期」として、双方の教育内容・方法の違いをそれぞれの独自性として尊重しながらも、生活、環境構成、教師と子ども・子どもたち同士の関係を含めて生活全体をつなげていくことを目指して研究をすすめてきた。

今では、「接続期の教育を考える」など普通に使われるようになってきているが、校種を超えてひとまとまりの時期として考えようとしたのは、本学附属の取り組みからである。これまでの研究の中で接続期に大事にすべきこととして共通理解してきた①安心して活動に取り組める時間や空間の保証、②生活に即した学びの構成、③子ども同士の関わり・教師の関わりを大前提として、幼小の学びのつながりを「幼小接続期保育分野・学習分野構想図」や「幼小接続期学びの概要」という形で表してきた。これまでの成果を大事にしながら、平成24年度は、新たな発展的な取り組みを試みた。

#### 3、接続期の学びの新たな取り組み—小学校

本学附属で10年前に研究に着手した幼小接続期の考え方は一般にも定着しつつある。しかし、接続期以降の小学校生活で、仲間と関わりにくく

自分勝手な行動が目立ったり、自分で考えて行動できなかつたりする子どもたちの姿がまだまだ課題としてあげられている。そこで、今まで接続期研究で大事にしてきたことをさらにブラッシュアップさせ、小学校での学びにつなげる方策を考え、10年目の変革を試みた。

自分のリズムで学び続ける姿勢や、他者と委ね合い、助け合って活動する喜びを味わう中で、自分で判断して活動を選び、責任をもって学ぶことを身につけることを目指し、以下の三つの手立てを考えた。

①個別学習の保障と対話的協働空間を設定する学習環境の工夫 ②自分のリズムで学習を進める計画表の導入と学習材開発 ③保護者の学習活動への参加

異なる生活経験を経てきた一人ひとりが自己肯定感をもち、他者とともに安心して主体的に学ぶ道筋を探る。また、協働して子どもを育てる大人として保護者と教師の連携を図る新たな取り組みについて報告する。

#### 4、仲間と共に育つ「接続前期」の生活—幼稚園

「接続前期」の実践も10年の時を重ねてきた。

「接続前期」の2つのねらい「関わりを広げ、深める」「体験の共有化をはかる」は継承しながら、平成24年度は「チーム活動の見直しや工夫」「継続して取り組む活動の重視」を柱に実践を重ねてきた。

「運動会」(10月初旬)に向けてチームを再編し、秋祭り「にほんワールド」(11月初旬)にも同じチームで取り組んだ。チームの仲間とチームの名前や取り組む内容を決める相談から始まり、役割を担い、年少児を楽しませる関わりを通して、5歳児一人ひとりに変容や成長がみられた。

「継続して取り組む活動」としては、学内に新たに作った畑の整備から栽培に携わり、園で飼育しているチャボの産卵から雛を無事に育てるために世話をする体験を重ねてきた。

「にほんワールド」の取り組みの中から事例をあげ、他の保育場面の事例も合わせて幼稚園から報告する。前年度までの「接続前期」活動との比較検討視点も入れながら、当該年度の特徴、課題と成果に触れたい。